

特集2

# 五島慶太翁生家

調査は、思いがけない  
“歴史ミステリー” 探索の旅に

調査  
レポート

# 実測プロジェクト

長野県青木村に、都市大グループの創設者である五島慶太翁の生家が現存する。150年前の古民家である。現在、農業を営む上野雅幸氏(84歳)が所有するこの家は、先々代が100年前に取得した建物であり、生活の場ではなく農機具などを置く倉庫等に使用しているため、当時の姿が比較的維持されている。しかし、老朽化は避けられず、また、上野氏の後継者もないため、解体される可能性が高いという。そこで慶太翁の生家として後世に伝えるため、実測・図面化し、それを基に模型による復元を目指すというプロジェクトがこの夏スタートした。

復元模型は、本プロジェクトを推進する東京都市大学建築学科・勝又英明教授とその研究室の学生たちが完成を目指し、現在制作に取り組んでいる。完成後は、慶太翁の教育事業の原点を象徴するものとして、また広く学生・教職員への自校教育の一つとして、五島記念館等に常設展示される予定である。

ここでは、その生家実測の様子を報告する。(記事:法人本部 渡辺 透)

6月、勝又英明教授率いる10名の実測部隊が結成され、8月6日～9日まで、3泊4日の合宿が青木村で繰り広げられた。以下、法人施設担当:渡辺透、修士2年:石川真吾、同:伊藤達彦、修士1年:小林祥子、同:鈴木俊介、同:戸田千春、学部4年:岡田拓大、同:境皓亮、同:寺林大樹の10名の布陣である。

ここで青木村について少し。慶太翁が生まれた長野県東部の青木村は、美しい山々に囲まれた静かな農山村である。標高500～850mで、慶太翁の生家は550mくらいに位置する。人口は4,616人。村の面積の8割は山林で、農用地は1割、農業主体の村だ。長野新幹線上田駅から約12km西方に位置し、国道143号線に沿って進むと、南におかみだけ、北に子檀嶺岳、西に十観山が前方左右に現れ、それぞれ1,200m強の「青木三山」と呼ばれる村民のシンボルが村を守っている風情である。美しく静かな村であるが、江戸時代から明治にかけて5回もの農民一揆が多発したところで、自らの命を顧みず庶民のために立ち上がった義民たちを誇りにしており、義民太鼓を創設し、義民精神を顕彰している。今では、市町村合併を拒否し、村としてのあり方を貫く姿勢が、義民精神のDNAとして受け継がれていると言えるかもしれない。また、気候は盆地のため、夏暑く、冬寒い。この夏の体験では、日が沈むと窓を開けて寝ると風邪をひくほど気温が下がる。

班は、長野新幹線の<sup>上田</sup>駅改札で落ち合い、駅レンタカーの軽自動車ワゴンRで目的地に急いだ。国道143号線に沿った「道の駅」にはほぼ予定通り12:30に食事処に集合でき、幸先の良いスタートとなった。



調査前のミーティング。勝又教授を中心に、実測調査の段取りやポイントなどを確認(左)。今回の調査では、関係者へのヒヤリングから得られる成果が非常に大きかった(右)。

食後、まず青木村役場の北村政夫村長を表敬訪問し、その後、14:15生家の所有者の上野雅幸氏宅を訪れた。ご挨拶後、ただちに実測に取り掛かるといいうハードな日程が組まれている。青木村役場の商工観光係の小林利行係長と児玉文子両氏に、今回のプロジェクトの支援者として活躍していただいた。美味しいお蕎麦屋、コンビニの斜め前にある快適な合宿所「青木村交流センター」、ひと汗流す田沢温泉や村営「くつろぎの湯」の紹介、また、生家周辺の「蜂の巣」退治までしていただくなど、ひ弱な都会人を力強く支えて下さった。

初日の実測は、18:00まで行われ、18:30温泉の後、宿舎でデスクワーク、20:30食事、さらに23:30までデスクワークを行い、0:30に消灯した。

**第1日目**  
8月6日、晴れ。  
勝又教授班(7名)と渡辺班(3名)の二手に分かれて、集合場所の青木村「道の駅」12:30をめぐりに東京を発った。勝又教授班は、都市大世田谷キャンパスで実測機材を8人乗りワゴン車のレンタカーに積み込み、8:30にスタート。渡辺

**第2日目**  
7日、晴れ。6:00起床、8:15実測開始。  
交流センターでのデスクワーク0:30までという一日となった。この日は、19:00から役場主催の地元の方々との交流が「青



木村コミュニティセンター」で開かれ、北村村長はじめ地元の約10名と実測部隊10名が交互に着席し、交歓の場となった。地元料理とお酒が振る舞われ、2時間にわたり楽しくまた貴重な情報交換が行われた。最後に、まだ2日目ではあったが実測の具体的な内容を学生から報告した。



役場の主催で行われた、村の方々との交流会のひとつ。地元料理を楽しんだ後は、途中経過ながら簡単な報告会も行われた。

### 第3日目

**8日、曇りのち断続的に小雨。5:00起床。**  
この日は、建築写真家日暮氏が現況の生家の撮影を実施。我々は、いつも通りの実測の後、2:00くらいまでデスクワークを行った。

後述するが、実測が進むにつれ生家の謎が深まり、歴史ミステリーの様相を呈してきた。



組まれた石垣なども、両端を見比べてみると、その緻密さや組み方に大きな違いがあることがわかった。



複雑に入り組んだ屋根の柱に、たび重なる増改築の跡が見とれる(上)。実測の後のデスクワークは、深夜まで行われることもあった(右)。



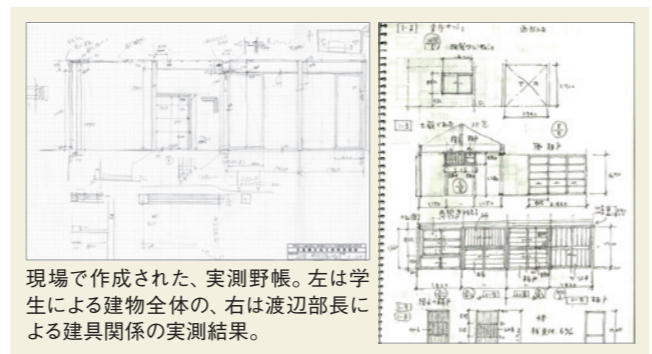
### 第4日目

**9日、曇り。気温が下がり過ごしやすい。**  
予定では午前中で実測を終え、午後撤収ということであったが、夕方まで実測を継続しなければならなかった。どうやら生家の南側は大きく改修されたと判断され、勝又教授は、周辺に残存する廃屋となった古い民家の探索も含め、復元に必要な証拠集めに力を注ぐ。上野氏への再ヒヤリングも重ね、150年前に想いを描く。東京での作業がどうなるか、ミステリーは続く。

さてここで、実測調査は、具体的にどのように行われたかを簡単に説明しておこう。

実測チームはA、B、C、3チームを結成。チームA：石川チーフは、外構、立面図、断面図を、チームB：小林チーフとCチーム：戸田チーフは、平面図、展開図、天井伏図を作成する任務を担当した。

この3チームが、作成した実測図面(「実測野帳」という)を照合しながら復元図を作成していくことになる。実測現場では、画板に挟んだA3版の方眼紙にフリーハンドで書かれた下図に、コンベックス(巻尺)で計測したミリ単位の寸法を書き込み、正確な図面が作成できるように注意を払う。二人が計測し、一人が下図に記録する態勢を取った。さらに現場の写真も小まめに撮影する。この記録をもとに宿舎でのデスクワークで、他チームの作成図面と照合しながら討議し、パソコンによるCADの図面に清書する作業が行われる。



現場で作成された、実測野帳。左は学生による建物全体の、右は渡辺部長による建具関係の実測結果。

その日の実測をその日のうちに、忘れぬよう清書することが大切である。不明なところは、翌日現場で再検証する。室内は暗い。ものを動かせば埃が舞う。周辺の蚊や蜂の襲撃をよけ悪戦苦闘する生家実測は、暑さとの戦いもあり、かなりハードなものであった。なるべく肌を出さず、防虫スプレー散布など防備するので、暑いのだ。事前の準備もあり、皆無事に帰還することができホッとしている。学生の皆様、お疲れ様でした。

## わずかな手掛かりから浮かび上がった、慶太翁生家の実像 研究プロジェクトリーダー、勝又英明教授に聞く

夏休み返上で実測調査資料を分析照合しながら、現況図面をCAD化する作業を進めていた勝又研究室のメンバーは、平面図、立面図、断面展開図を作成するうちに、大きな謎にぶつかった。古民家にはよくあることだが、現在の形態になる前に何度も増改築が繰り返され、慶太翁の生活当時とはかなり異なる建物になっているというのだ。

必要に応じて場当たりに増改築が繰り返される古民家の場合、当時の図面や記録はほとんど存在しない。そのため、当時を知る人からの聞き取り調査や、柱のほぞ穴の位置などわずかな手掛かりから当時の姿を推理していくしかない。今回はまさにこうした文化財の調査にも似たような方法で、歴史ミステリー探索の旅が進められた。

### ◎ 勝又教授コメント(要約) ◎

小林慶太少年が生家で暮らした時期は、1882年(明治15年)誕生から、1901年(明治34年)、19歳くらいまでと予想される。なぜなら、翌明治35年に東京高等師範学校に入学しているからである。ちなみに生家の竣工は1860年頃、約150年前なので江戸時代であり、また慶太翁誕生時は、築22年ということになる。勝又研ではさらに現地調査を8月18～19日、9月16～17日、9月21日と三回実施し、現状の生家が五期にわたって増改築されたものであることがわかった。

慶太翁が住んでいた1900年頃の生家の形態は、どんなものであったのか。それを推測し、当時の図面と模型製作を行うのがこのプロジェクトの使命である。

第一期は、延べ30坪くらいの茅葺の寄せ棟の大きな屋根を持つシンプルな平屋建てで、2階部分はない。第二期は、北側に1間半(2.7mほど)の幅で10坪ほどの増築をするとともに、吹き抜けていた部分に床を張り2階建とし、養蚕を始めた。青木村殿戸地区は、養蚕農家が多く、小林家でも養蚕を行っていたことが、記録などからも分かっている。第三期は、やはり養蚕のため西側の一部寄せ棟屋根を切妻屋根に変え、2階を増床した。この時期まで小林家が所有していたが、1915年(大正4年)に、現在の所有者・上野雅幸氏の祖父である上野彦蔵



氏が、この家を購入した。そして第四期は、南側に下屋を出し2階にベランダのような廊下を増床し、茅葺寄せ棟の屋根形状が大きく変わった。そして第五期が、現在、上野雅幸氏が改築し座敷を土間にするなどして、農機具などの倉庫として利用している。従って、今回の復元模型は、第二期(1915年頃まで)を五島慶太翁の生家と考え作成する予定である。

このようなミステリーの謎解きは、現地調査を第一とし、柱や梁に穿たれたほぞ穴の位置、材料の古さの順番付、屋根裏に付く煤の汚れ方、外部と内部の風速の違いによる板材の古び方、民家の文献、青木村村誌などから当時の構造を類推した。学生の中には、誰もが見落としがちな証拠を独自の閃きで見つけだしたり、今思えば早い段階で真相に迫っていた者などいて、学生の洞察力に驚かされる場面も少なくなかった。

また他の古い農家の探索、似たものを探することも重要である。殿戸地区は家並みの美しい比較的裕福な養蚕農家が多くあり、そうした地域の生活水準から、慶太翁の当時の暮らしぶりなども想像することができた。さらに青木村は、義民精神が強く、義民太鼓など芸能文化伝統の調査にも踏み込んだ。そして、関係者のヒヤリングを繰り返し行ったことから得た成果も大切であった。生家所有者の上野雅幸・チエご夫妻(84・79歳)、上野光彦氏(67歳、親戚)、戸島幸一郎氏(73歳、昭和40年以降から慶太翁生家の改築を手掛けた大工)といった方々へのヒヤリングは、勝又教授、学部4年・境皓亮、同・寺林大樹が当たったが、皆様に辛抱強くお話しただいたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。

以上が先生のお話の要約であります。9月24日現在、ほぼ復元図が完成し、模型製作図に移行し、模型製作に入る予定です。復元模型がどのような姿で立ち現れるか乞うご期待というところです。皆様、頑張ってください!